

事務所ニーズとのマッチングを成立させながら、現場実証へと進む官民連携の取り組みを促す。加

3協議会の議論さらに深化 6月4日に総会開催へ 近未来コンクリート研究会

近未来コンクリート研究会（十河茂幸代表）は12日、広島市内で2025年度第3回となる協議会を開いた。3つのテーマ別で開催している協議会には、実会場に加えて東京・大阪など遠方からのWEB参加など合計約70人が参加。コンクリート

の施工性、脱炭素延命化の各テーマにおいて活発な議論が展開された。

十河代表は冒頭、大阪市北区で発生した鋼製管の隆起事故に触れ、「原因はおそらく摩擦力という当てにならない力を過信した計算ミス。再発防止のためにも本協議会のような場でしっかりと勉強していくべきだ」と呼びかけた。

広島工業大学の竹田宣典教授を主査として開催された「コンクリートの施工性改善技術研究（CⅡ）協議会」では、継続的に検討を行ってきた後添加型流動化剤増粘タイプによる施工改善実験において、スランプを増大させた高さ70cmの供試体で骨材の分離状況を調べた結果、材料分離に有意な差がないことを確認。これを受け、今後本実験

のIT・情報通信や製造業などの異分野で培われた技術で、建設現場における土工、小構造物及び

として現場施工を行う予定としたほか、沈下ひび割れの防止に少量の分離低減剤を後添加することや、残コン・戻りコンの削減の是非などについても意見交換した。

同大学の坂本英輔教授が主査を務める「脱炭素コンクリート技術研究（S）協議会」では、牡蠣殻粉末のコンクリート材料としての利用可能性についての予備的実験結果

場ニーズに対応する新たな技術シーズ」として、管内事務所から建設現場で課題となっているニ

を紹介し、さらに検討を進めることで一致。2025年度日本建築学会中国支部研究発表会で発表された論文2編についても情報共有した。

直轄事業計画は、各事業の26年度における事業

また、コンクリートメンテナン

を調査設計を行うほか、上限値に近い事業費が確保されれば、用地買収や改良工を実施する。2号台は0.5〜3



ンテナンス協会の江良和徳専務理事を中心に進めている「RC構造物の延命化技術（M）研究協議会」では、会員の坂田正宏氏（エイコー技術コンサルタント）が「建設部門の安全の工場のための方策」をテーマに発注者側の経験と労働安全コンサルタントの視点から説明したほか、コンクリートメンテナン

式の入札後競争入札で開札した「中下区太田川橋下部工その他」について

—広島市—

41億円で河井建設工業

広島市は、式の入札後競争入札で開札した「中下区太田川橋下部工その他」について

を予定。いず